

## 文語の苑」シンポジウム in 北海道

仲 紀久郎

平成廿七年十月十七日（土） 快晴

室蘭出身の芥川賞作家、三浦清宏先生の御盡力を賜り、北海道にて初の文語シンポジウム開催す。晩秋の北海道とは思へぬ暖かき日の中、室蘭市港の文學館二階の会場には熱心なる聴衆二百餘名の參集を得、開會前より既に熱氣充滿す。

午後一時、横田挺一文學館の會會長より開會の辭。引續き、室蘭市長青山剛氏より歡迎の御挨拶を賜る。次に文學館の會名譽會長の三浦先生の御挨拶にて、室蘭シンポジウム開催に至る経緯、先生と文語の苑、及び愛甲理事長との關り、理事長病の爲不参加になりたる事、更に文語の苑發起人の一人岡崎久彦氏と先生との御關係、本年より開催の岡崎久彦文語賞等の御話有り。先生は地元の名士なれば此の御挨拶にて既に會場の雰囲気は最高潮に達したる感有り。

高橋はるみ北海道知事の御祝辭の傳達あり。基調講演に入るに先立ち本會副理事長加藤より挨拶及び理事長缺席の御詫びを申し上げ。 「今なぜ文語か」の講演は小生代讀す。内容は地元新聞に掲載されたり。室蘭民報はシンポジウムの二箇月前より週一度、六回に亙り今回のシンポジウムに關する記事を連載す。愛甲理事長の文章もその一部なり。また、各地の文語教室、文語の苑關連の出版物の紹介を簡單に行ふ。

次に加藤副理事長の「北海道と文語」菅江眞澄、松浦武四郎と三人の詩人たち」と題する講演あり。先づ、北海道所縁の詩人として石川啄木、宮澤賢治、北原白秋の詩を紹介し、次に菅江眞澄、松浦武四郎の業績を辿る。蝦夷地松前藩の大層豊かなりしこと、菅江と松浦との活躍時期凡そ五十年の隔りの間にアイヌの生活には多大なる變化がありしこと等、圖版肖像等も用ゐての説明を聴衆鑑賞しつつ傾聽す。

ここで暫し休憩の後、地元出身のソプラノ歌手中森芳恵氏の「文語の響きを歌にのせて」と題する歌唱を樂しむ。ピアノ伴奏も地元の酒井由美子氏、曲目は、古里の四季と題して「故郷」、「春の小川」、「夏は來ぬ」、「紅葉」、等々文語詩による歌曲の數々なり。

締め括りは三浦先生の司會によるパネルディスカッションを行ふ。横田會長、加藤講師、「文化のまち室蘭會議」の佐藤愼吾代表に小生も加はり、夫々文語との出會ひ、文語の愉しみ等を述べ、盛會の裡に閉會と相成る。參加者の一員としても、眞に樂しきシンポジウムなりき。各先生方、聴衆の皆様、並びに文學館の會ボランティアの方々には感謝の言葉あるのみ。

（平成二十七年十一月二十一日受附）